

配偶者/パートナーからの 虐待が母親としての女性に 与える影響とは

- 女性は自分が悪い母親だと思い込むようになる
- 女性は自分の子供から尊敬されなくなる
- 女性は虐待者のゆがんだ言い訳を鵜呑みにする（例、それは宗教的にも正しい行為であるとか、酒の飲みすぎだったという言い訳）
- 虐待者の育児スタイルの影響を受けて、女性の育児スタイルが不健全な方向へ変わってしまう
- 毎日の子供の世話が、どうすればいいかわからない状態になる
- 女性は自分の身を守るため薬物やアルコールの乱用といった逃避的な行動に走り、その結果、子育てに否定的な効果育児に悪影響を及ぼす可能性がある
- 女性の子供との感情的な結びつきが危うい状態になる
- 女性は子供を自分の側につかせようとして、父親との対抗意識にとらわれてしまう（特に別居後）



オンタリオ州政府が財政的支援を行います。

ここに示されるのは、Centre for Children & Families in the Justice System の見解であり、必ずしもオンタリオ州政府の見解を反映しているものではありません。

その他関連機関:

Assaulted Women's Helpline (DV 被害女性ヘルプライン)
(24 時間) 1-866-863-0511 (オンタリオ州)
(416) 863-0511 (GTA エリア)
1-866-863-7868 (TTY: 聴覚障害者専用ダイヤル)

Parent Help Line (親のためのヘルプライン)
(24 時間) 1-888-603-9100

ShelterNet (シェルター連絡情報)
www.shelternet.ca

Education Wife Assault (DV についての情報)
www.womanabuseprevention.com

**Ontario Women's Directorate
(オンタリオ州政府による被害者支援情報)**
www.ontariowomensdirectorate.gov.on.ca

このパンフレット内容の抜粋元:

**Helping Children Thrive
(子育てのためのアドバイス):
Supporting Woman
Abuse Survivors as Mothers**

(虐待関係と戦う母親をサポートする)
(2004 年)、リンダ・L・ベーカー、
アリソン・J・カニンガム共著

全文はインターネット www.lfcc.on.ca でご覧いただけます。あるいは、下記住所にお尋ねください。



200 - 254 Pall Mall St.
London ON N6A 5P6 CANADA

info@lfcc.on.ca

© 2004 Centre for Children and Families in the Justice System

子育ての ための アドバイス



DV被害から逃れた
母親のための
インフォメーション

以下のような子育ての基本原則は、子どもが、母親への暴力を見ながら育ってきた場合には特に重要です。

① 子どもへの見本となる役割モデルになること

子どもはあなたを見て、あなたがするのと同じように行動します。他者の尊重(および自己の尊重)、礼儀正しいこと、正直であること、的確な判断、やさしさ・思いやり、適切な感情表現、性差別的でない態度など、子どもに身につけてほしいと思う態度はあなた自身がモデルになって子ども達に示すことができます。

② 何をしてほしいのか、子どもにはわかりやすく具体的に言うこと

小さい子ども達との生活は「だめ」「しないで」「やめなさい」の繰り返しになりがちです。してはいけないことを教えるのは大切ですが、その代わりにどう行動なら受け入れられるのかも教えましょう。

「子猫をぶっちゃだめ！」の代わりに

「やさしくなでてごらん」。

「ぐずぐず言わないの！」の代わりに

「どうしてほしいか自分の言葉で言ってごらん」。

つまり、あることをしてほしくないとき、どんな行動をとればいいのかを言うことができます。ただ、これはどんな状況でも使えるわけではありません。「火遊びをしてはいけない」という忠告はやはり必要です。

③ よい行動をしたらほめること

悪いふるまいはよいふるまいより関心を引きやすいものです。よい行動をしたときにほめるようにすると、よい行動が増えるでしょう。

「上手におもちゃを片付けたね」

「仲良く妹とおもちゃを使っているね」

「放課後にティナの家に行くと電話をくれてありがとう。これで心配しなくてすんだわ」

子育ての専門家は、悪い行いをただすときは1回につき、「ほめ言葉」を5回言うことをすすめています。

④ 子どもの行動に焦点を絞ること

どんなに子どもを愛していても、いつも子どものふるまいを愛せるわけではありません。ほめるときは(たしなめるときも)、子どもの性質に言及するより、子どもの行動に焦点を当ててコメントしてみましょう。

「あんたはなんて散らかし屋なの！」の代わりに

「こんなに散らかった居間は好きじゃないわ」と話してみることができます。

家族暴力があったとき、男の子は将来虐待者になり女の子は被害者になると決めてかからないようにしましょう。つぎのような言葉が口から出そうになったら、自分を抑えて**決して言わないようにします**。「あんたはお父さんそっくりよ！」

⑤ 子どもに要求するときは、理由を説明する

「テレビを消して！」の代わりに

「お母さんは頭痛がするの。テレビの音を小さくしてくれたらちょっと横になれるんだけどな」と話してみます。

「そこから降りなさい！」の代わりに

「本箱が倒れて下敷きになるかもしれないから、その上に乗るのをやめてね」と話してみます。

理由を知ると、子ども達は言われたことにすぐに従います。従わないときでもしばらくすると、行動には必ず影響と結果がともなうことに気づきます。また、自分以外のものの見方も理解するようになるでしょう。

⑥ しつけから感情を排除すること

どんな母親も疲れてイライラし、怒りやすくなる時があります。そんな時に子ども達の行儀が悪いとどうしようもない気分になりますよね。でも、反応する前に3つ数え、深呼吸して、つぎに言う言葉をよく考えてみましょう。しつけとは、よく考え抜かれた教育法であって、感情的な反応ではありません。

…そして声を荒げないようにします

いつも大声が聞こえる環境では、子ども達は大声を出されても無視します。言い争いやわめき声が常にある生活だと、子ども達はそうした音を自ら消して聞こえなくします。普段と変わらない声の調子で話すようにしましょう。声の大きさではなく言葉で自分の言いたいことを子どもの耳に届けさせます。緊急のときだけに大声を出すようにすると(例えば子どもがボールを追い

かけて車道に飛び出そうとしたときなど)子どもは親の声に注意を向けるようになります。

⑦ 子どもに選択を与えること。但し無制限な選択でなく

「ベッドに行きたい？」の代わりに

「さあ、ベッドに行く時間だ。読んであげるのはこの本がいい？それともこっちかな？」と話してみます。

ベッドに行くのは決まりきったことで、選択はないので選択は与えません。それは変更不可能なまじりで予測可能な日課のひとつだと子どもが理解すれば、子どもを寝かしつけるのはそんなに難しくなくなります。2者のうちからひとつを選ばせると(例えば、赤いパジャマか青いパジャマのどちらか)、逆らいたい衝動を別の方向にそらすことができます。

⑧ 子ども達に無理なことを期待してはいけない

昼寝時間に幼児を買物に連れて行くと不機嫌になります。10代の子ども達に8時の門限を守るよう期待しても現実的ではありません。子ども達に期待することは年令に応じたものにしましょう。

⑨ 大人の問題は大人の間だけにとどめる

大人の問題を理解するにはまだ幼すぎる子どもが大人の問題を聞かされると、動揺することがあります。子どもに話すことと家族や友人に話すことをはっきり分けるようにしましょう。子どもに、自分の問題を打ち明ける相談相手になってほしいと期待するのは間違っています。親であるあなたこそが子ども達に責任を持つ側なのです。

⑩ 子どもと一緒にあそんだり、話をして過ごす時間をつくること

子ども達はあなたの関心がほしくて行動に出ることがあります。行儀悪くすることが関心を得るための唯一の手段になっていると、行儀の悪さはこれからも続きます。人生はやるべきことが多くて時間がないものです。だから遊ぶ時間、話す時間、何もせずただぶらぶらと過ごす時間をあえて作るようにしましょう。二人以上子どもがいる人は、ひとりひとりの子どもと一対一で過ごす時間を探ることが大切です。